

日本最大の江戸城と 城下のにぎわい

静岡大学名誉教授 小和田哲男

『江戸図屏風』は六曲一双で、ここに示したのは、その左隻の一部分である。江戸城と城下町を東から俯瞰した図柄となっている。六曲一双の全画面には何と5000人もの人が描かれているという。

この屏風の制作年は不詳だが、寛永15年（1638）完成の天守が描かれ、しかもその天守は明暦3年（1657）の明暦の大火で焼失してしまっているの、寛永末年、つまり、3代将軍徳川家光の時代の江戸城とその城下のにぎわいを描いたものだということがうかがわれる。

江戸城は、古くは太田道灌が築き、その後、戦国大名北条氏の支城だった時代が長く、天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻め後、北条遺領を与えられた徳川家康が居城とした。はじめ、一大名の居城にすぎなかった江戸城であるが、関ヶ原の戦い後の慶長8年（1603）、家康が征夷大将軍になったことで、江戸城の性格は大きく変わり、将軍の城として、天下普請によって築城工事が続けられたのである。

天下普請は、諸大名に築城工事を手伝わせることで、そのため御手伝普請ともいわれている。大名たちは石高に応じて人足を出し、石垣を積んだり、埋め立て工事を行った。当時の江戸は、江戸湾（東京湾）が江戸城近くまできている状態で、埋め立てによって城地を広げ、また大名屋敷を確保していったのである。

画面中央のやや右側に建っているのが天守である。江戸城の天守は家康時代の慶長天守、秀忠時代の元和天守、そして家光時代の寛永天守というように、三度建て直されている。したがって、ここに描かれているのは家光の寛永天守ということになるが、高さは58mもあったといわれている。現在の20階建てのビルに匹敵し、これは、現存する天守で最大の高さを誇る姫路城の天守を凌ぎ、

いうまでもなく、日本最大だった。城の広さも日本一、天守の大きさも日本一、まさに、将軍の城にふさわしい規模である。

天守の手前にいくつもの建物が並んでいるようすが見えるが、これが本丸御殿である。画面からはよくわからないが、本丸御殿は大奥と中奥、それに表向の三つの空間からなっていた。大奥はいわば将軍私邸、表向が公邸ということになり、政務を執るのは表向で、大奥は、将軍の正室・側室、それに数多くの奥女中たちの住む場所となっていた。中奥は将軍の居室で、昼の居間として使われていた。なお、中奥には側用人などの将軍が個人的に信任する側近も出入りしていたのである。

なお、大奥と表向の建物とは銅堀で厳重に区切られ、御鈴廊下だけでつながれており、そこから先は将軍以外の男子が立ち入ることはできなかった。

さて、この『江戸図屏風』で注目されるのは、江戸城だけでなく城下の部分も描かれていることである。江戸の人口は18世紀には100万人を超え、パリやロンドンを凌ぐ世界最大の都市に成長するが、17世紀前半の段階はまだそこまではしていない。

しかし、寛永12年（1635）の「武家諸法度」の改定で、参勤交代が制度化されたことにより、諸藩の藩主は江戸に屋敷を構えることになり、江戸城の周辺に大名屋敷が建てられるようになった。屏風の城に近いところの屋敷はそうした大名屋敷である。

それに対し、図の下の部分に描かれている規模の小さな家は商人・職人、すなわち町人たちの町屋である。何の商売かがすぐわかるようにのれんを吊るしているようすもうかがわれて興味深い。この『江戸図屏風』は、武士たちだけでなく、町人たちの生き生きとした姿も描かれているのが特徴である。

大名屋敷の面積が広いと、町人が江戸の人口の50パーセントを占めるのに、町人地の面積はわずか16パーセントほどだったといわれている。そこにも身分の差がみられる。